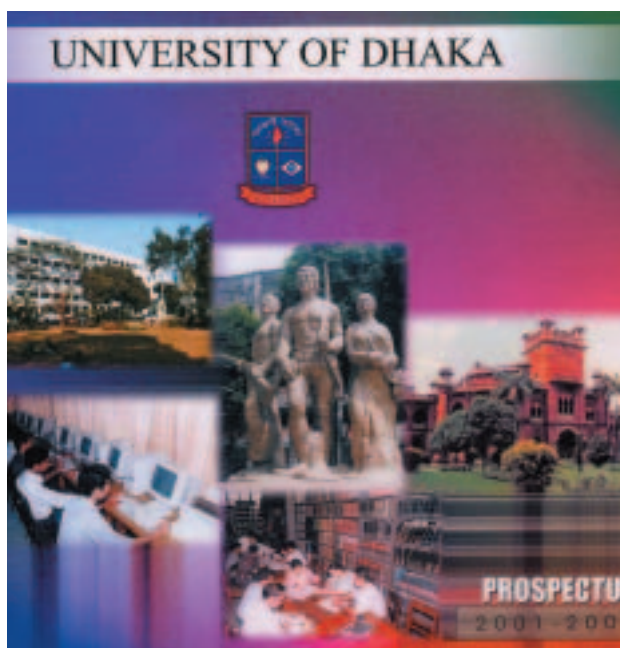


NEWSLETTER



ダッカ大学 (バングラディシュ)



シドニー大学 (オーストラリア)

岐阜大学の国際化



岐阜大学国際交流委員会委員長 (副学長) 森 秀樹

岐阜大学の国際化とは究極的には本学が国際的に一流の大学と評価される大学になることを意味し、先進的で国際的な教育・研究を展開できる強い競争力を持った組織になることを示す。国際化が高度に進めば、多くの教員と学生が自由に英語を話し、授業のかなりが英語で行われ、学生と留学生と一緒に教育を受け、多くの外国人研究者が常時滞在し、多くの教職員・学生が協定大学 (現在27大学) に赴くことになるはずである。そうならば、本学も我が国が直面している世界共通の課題や科学技術の国際展開に積極的対応が可能になる。しかしながら、現実には本学の教員・学生の英語力も必ずし

も高いとは言えず、教員・学生の国際移動もさほど多くなく、留学生の受け入れもアジア諸国に偏っている。国際交流委員会では岐阜大学の国際化を目指し、国際交流の基本戦略について議論を重ねている。この基本構想では外国語教育の充実を最大課題の一つとしている。この課題には外国語教育のカリキュラム改善や外国語教育を促進する環境整備などの問題が関係する。その為、国際交流委員会、留学生センター、共通教育の関係者など、広い層の人々の連携のもとに対策を進める必要がある。幸い、本学には教育GPに4件も採択されている如く、教育に関して他の大学には無い優れたノウハウがある。今後、E-learningの利用を含めて各学部、研究科の教育カリキュラムを改善し、国際化に対応していく必要がある。

在 外 研 究 報 告

ソウル産業大学 (韓国)にて

岐阜大学地域科学部助教授

牧 秀樹



私は、2004年10月の1ヶ月間をソウル産業大学の人文社会学部の英語科で過ごした。指導教官は、Lee Myung-Hwan氏である。この滞在は、田口福寿会からの支援による。この滞在期間における調査の題目は、韓国における最小英語テスト(The Minimal English Test (MET))である。牧、和佐田、橋本(2003)は、METを開発し、それが、2002年度センター試験英語と統計的に有意な相関があることを発見した。METは、A4用紙1枚に書かれた英文の中の空白部分に、CDから流れてくる英語を聞きながら、正確な単語を埋めていくだけの簡単なテストで、所要時間は、約5分である。今回の調査の目的は、METと韓国におけるセンター試験英語が、日本で得られたように、統計的に有意な相関があるかどうか調査することである。Lee氏の協力で、サンプル総数は、110程度になった。現段階では、分析は完了していないが、回収されたテスト用紙を見て、明らかである。それは、これまで見てきた日本の大学生の結果と比較して、格段に正解率が高いということである。つま

り、聴解力が極めて優れているのである。韓国では、センター試験英語に聴解テストが含まれていることが、その一つの要因であると言えるかもしれない。今後は、今回の調査を足掛かりに、岐阜大学における英語教育に必要なものを特定していく作業に取り掛かりたい。



▲ソウル産業大学正面から



◀人文社会学棟



▶コンピューターセンター(建設中)

「地域環境国際学術交流」 に参加して

地域科学部教授 粕谷 志郎



カンピーナス大学(ブラジル)、浙江大學(中国)を招き、去る9月25日、岐阜市の国際会議場にて、環境とエネルギーに関する国際会議がもたれた。ブラジルは、一次エネルギーの35.4%(12.8%の水力発電を含む)を再生可能エネルギーでまかなっている、いわば、この分野の先進国である。しかし、一方ではアマゾン川流域の破壊、大都市を流れるドブ川と化した水路などの問題を抱えている。中国はめざましい経済成長を遂げているが、エネルギーの62%を石炭に、17%をバイオマスに依存している。大気汚染や酸性雨、さらには再生不能なバイオマス依存による森林の荒廃などの問題を持っている。振り返って日本を見てみると、石油51.8%、石炭17.9%、原子力12.4%、天然ガス13.1%となっており、「新エネルギーなど」がたった1.1%である(2000年度、経済産業省)。これらお国事情を背景に、環境問題も含め問題提起がなされた。日本からは、私と座長も務められた工学部の守富寛教授、岐阜薬科大学の佐治木弘尚助教授、あいさつをいただいた黒木登志夫学長が出席した。佐治木先生のPCBやダイオキシンを無毒化する脱塩素反応も注

目を集めた。今回は、岐阜市主催の「環境フェア」の一環として、岐阜市の全面的なバックアップでなされた。昨年は岐阜大とカンピーナス大学で第一回の国際会議がもたれ、今回はその延長として、第二回の位置づけもあった。今回は、中国がホストを務めて下さるように話は進んだ。環境とエネルギーの国際共同研究が、さらに大きな輪となって続いていくことを願ってやまない。

地球環境国際学術交流
(2004.9.25
岐阜市国際会議場にて)



外国人留学生からのメッセージ

工学部外国人特別聴講学生

河野 貴志
(ブラジル)



ブラジルのカンピーナス大学から交換留学生として岐阜大学へ来ました。

日本に着いてすぐ目にしたのが、父からよく聞いていた桜の花の美しいすがたでした。私はその時、すばらしい一年の始まりだと思いました。

最初は不安でしたが、岐阜大学の留学生センターのスタッフや日本人、他の留学生にとっても親切にもらったので、すぐに日本の生活になれました。平日は日本語の勉強、休日にはできるだけ旅行をしようと決めました。そして、ブラジルではできない様々な体験をさせてもらいました。その中で最もうれしかったことは17年ぶりに親戚と会い、成長した自分の姿を見てもらえたことでした。

国際交流会館での生活を通して、日本人だけではなく、様々な国の人と出会い、一緒に旅行や食事や飲み会などをして楽しい毎日を過ごし、その中で一生の友達を得る

こともできました。

私のように日本をより良く理解したい人には、岐阜大学で行く一年に二回ほどの留学生旅行がいいと思います。手頃な値段で日本の代表的な場所へ行って、とてもよい経験ができます。

日本に来てから8か月たって自分の姿を見ると、ずいぶん成長できたと思います。日本語が上達しただけではなく、人間として強くなりました。一生忘れられない素晴らしい日々をすごしています。

皆さん、本当にありがとうございます。



外国人留学生からのメッセージ

岐阜大学地域科学研究科
地域文化専攻 1年

白 春花
(中国)



中国からやってきました、白春花と申します！

私の留学生活は研究生として始まりました。新しい環境での新しい先生と友達、以前とまったく違う言葉で勉強しなければなりません。日本に来たばかりのころ、私がコミュニケーションをとるためによく使う手段はジェスチャーと書くことでした。ただ、書くときにはお互いの意味がずれてしまう時がありました！たとえば、日本語の「走る」は中国語では「歩く」の意味で、日本語の「大丈夫」と書く漢字は中国語では「一人前の男」の意味となり、日本語での「手紙」は中国では「トイレトペーパー」の意味となります。ちなみに、カタカナの当て字で「マクドナルド」を中国では「麦当劳」と表します。このような違いを分からなかった頃には、面白かった事、恥ずかしかった事、沢山ありました！

今年の四月からはM1の生活がはじまりました。はじめて、勉強って大変なことだなと思いました！たまにはちょっと勉強をサボりたいと思うときもありましたが、書かなければならないレポートなどが山積みとなっている様子が頭に浮かんで、結局はアーキーラーメるんです！そのうちに、本に追いかける生活になって、今では本と一緒にすごす毎日が楽しくなりました！

日本に来てもうそろそろ一年半になり、留学生活の中でいろいろな方々にご迷惑をかけながら今までやってき

ました。本当に有難い気持ちで胸いっぱいです。そして、今まで気付かなかった自分に対して見直すチャンスにもなり、自分を大きく成長させるチャンスにもなりました。これからも楽しく充実した毎日を送っていきたいと思います。



留学生体験記

グリフィス大学 (オーストラリア) に留学

教育学部 障害児教育 4年
廣瀬 千春



私は大学4年時の7月から1年間、オーストラリアのグリフィス大学に交換留学させていただきました。留学体験で得たものは多くありますが、ここでは「オーストラリアだからできた」という点で振り返ろうと思います。

「オーストラリアだからできた」ということの1つに、実際に行ってみないと分からない生のオーストラリアを感じ、体験できたことがあります。グリフィス大学は東海岸の都市ブリスベンにあり、その過ごしやすい気候、豊かな自然・動物、ビーチ、自慢のスポーツ・芸術に休暇を使い存分に触れることができました。1年の間には、様々な行事を体験したり、小学校に日本語を教えに通ったり、ボランティアで障害を有する方と触れ合ったりと貴重な体験をしました。大学で「Australia Today」という講義を受講し、各国の留学生とそれぞれの国とオーストラリアを比較しながら歴史・文化・社会について理解を深めていったのも、ここだからできたと思えることです。

「オーストラリアだからできた」の極めつけは、やはりオーストラリアの人々と出会えたことです。留学の後半にはホームステイをしました。生粋のオーストラリア

人夫婦との生活を楽しむだけでなく、彼らと様々なテーマについてしばしば話しました。ホストファザーはこの国の土地・文化・歴史に誇りを持っていると同時に、冷静に国の問題・課題について考え



を持ち、特に住む人々の民族が違う社会でどうしたらそれぞれの民族が幸せに生活できるかということについて話してくれました。ホストファザーから感じた愛国心と世界の人々と共生するという視点は、彼以外にも近所に住んでいるイタリア人・中国人の家族、スーパーで声を掛けてくれたおじさん、バスの運転手さん、大学の教授、友人の家族、などの人からも感じました。私には欠けている部分に気づきました。

留学は私にとって大きなチャレンジでした。一年間を終えた今、「チャレンジして良かった」という達成感と、「感じ考えたことを生かしていかなければいけない」と考えています。ありがとうございました。



留学生体験記

エアフルト大学(ドイツ)に 留学

地域科学研究科
地域文化専攻 2年
太田 尚孝



エアフルト大学に留学して、半年が過ぎました。岐阜大学とエアフルト大学との交換留学は、今年度からスタートしています。岐阜大学からは、第一期生として2名が派遣されています。4月の到着当初は、言葉の面だけではなく、ドイツ人学生との共同生活などで苦労しましたが、現在はこちらの生活にも慣れてきました。

エアフルト市は、チューリンゲン州の州都で、かつての東ドイツ地域に位置しています。90年の統一から10数年が過ぎましたが、いまだに市内では大規模な都市再開発事業が行われています。

私の場合、修士論文のためのフィールドワークをエアフルト市で行うことも留学の目的にしています。そのため8月から市内のシュトッテルンハイムという地区に住んでいます(3500人の住民の中で、もちろん私だけが日本人です!)。住民とのインタビュー、地区の会議や

お祭りに参加しながら、ドイツのまちづくり活動を研究しています。

エアフルト大学では、留学生の受け入れを積極的に行っています。留学生を対象にしたドイツ語コース(上級・中級・初級)や英語で授業を行う公共政策コースも設けられています。4000人と小規模な大学ですが、学生数も増加の一途で今後の発展が楽しみです。



▲市役所前の路面電車停留所



▲モダンなエアフルト大学の図書館

短期留学推進制度（派遣）の留学情報

この制度は、大学間交流協定に基づき、外国の大学との間で相互に学生を交換する場合に、下記の「資格及び条件」を満たしている者を、日本国際教育協会に奨学金候補者として推薦する制度です。

渡航時期は、4月1日から翌年の3月15日までの間に渡航できる者です。

「資格及び条件」

- ①派遣する期間は、3か月以上1年以内
- ②短期留学生派遣計画に基づき、派遣先大学が受入れを許可する者
- ③学業成績が優秀で、人物等に優れ、学部長又は研究科長が推薦する者
- ④派遣先大学での専攻は問わないが、留学の目的及び計画が明確で海外への留学により、効果が期待できる者
- ⑤経済的理由により、自費のみでの留学が困難な者
- ⑥留学期間終了後、本学に戻り学業を継続する者または本学の学位を取得する者

なお、日本国際教育協会の奨学生として不採択になった場合でも自費(私費)により留学することができ、派遣先大学での授業料等の免除と一定数の単位互換が認められます。

※1 英語圏へ留学する場合は、申請に当たりTOEFLスコアの提出を要求されますので、事前に受験し取得しておく必要があります。(英語圏への留学は、TOEFL-CBTスコアで173点以上が目安となります。また、TOEFLスコアは次に記載する岐阜大学の奨学金制度に応募する場合にも必要です。)

※2 申請手続きは、毎年9月中旬を目途に各学部(研究科)に通知します。申請した結果については、日本国際教育協会から、1月下旬に決定通知があります。

※3 派遣先大学等は、P6の表を参照してください。

短期留学の奨学金情報

本学には、学術交流協定を締結している外国の大学へ短期留学を希望する学生(外国人留学生を除く。)に対して、選考の上奨学金を支給する制度があります。

この制度は、外国の大学へ短期留学する者の経済的支援を行い、外国留学を促すことにより、学生の国際交流意識を高め、国際感覚を備えた人材の養成を目的に制定されたもので、概略は次のとおりです。

「資格」

次の要件をすべて満たす者

- ①学業成績が優秀で、人格等が優れている者
- ②留学先の大学において、教育を受けるに十分な外国語の能力を有する者(上記※1参照)
- ③帰国後も引き続き本学において学業を継続する意志を有する者
- ④他の機関から留学のための奨学金を受給していない者

「奨学金」

月額5万円又は4万円を1年以内

「1年に採用する奨学生」

2人以内

なお、この制度による奨学生の募集は、毎年9月に日本国際教育協会の奨学生募集と同時にいきます。

研究者交流助成事業（大学院学生の海外派遣）

岐阜大学国際交流委員会による学術交流協定大学との研究者交流(派遣・招へい)助成事業について、平成14年度から、大学院学生の派遣も助成の対象となりました。詳しくは岐阜大学ホームページでもご覧いただけます。

学術交流協定大学との研究者交流(派遣・招へい)助成要項 - 抜粋 -

(対象者)

第二 助成の対象となる者は、本学の専任教員で、学術交流協定大学との教育・研究活動について次の各号に掲げる具体的な計画のあるものとする。

- 一 講義
- 二 講演
- 三 共同研究等

2 前項に規定するもののほか、本学の大学院学生で、学術交流協定大学で行う共同研究等のため、派遣されるものも、助成の対象とする。

(派遣・招へい人員)

第三 派遣・招へい人員は、各年若干人とする。

(派遣・招へい経費)

第四 助成金は、本学国際交流促進のための奨学寄附金の一部を充て、旅費及び滞在費を支給する。この場合、航空運賃は最下級運賃とし、旅費及び滞在費の支給額に限度を設けることがある。

学術交流協定締結

■大学間協定 (26大学)

(平成16.12.1現在)

大 学 名	国 名	協定締結日	大 学 名	国 名	協定締結日
※カンピナス大学	ブラジル	1984. 8.27	※ユタ州立大学	米 国	1997. 5.29
※サンディエゴ州立大学	米 国	1985. 5. 7	※ハノイ工科大学	ベトナム	1998. 6.26
浙江 大 学	中 国	1986. 4.21	ウエストバージニア大学	米 国	1998.12.16
広 西 大 学	中 国	1986. 4.24	カセサート大学	タ イ	1999. 8. 5
電 子 科 技 大 学	中 国	1986. 7.21	※アバテイダンディ大学	連 合 王 国	2000. 6.28
※江 南 大 学	中 国	1986. 9. 3	内 蒙 古 農 業 大 学	中 国	2000. 8. 8
中 国 医 科 大 学	中 国	1987. 8.15	※シドニー工科大学	オーストラリア	2000. 8.14
※ル ン ド 大 学	スウェーデン	1987. 9.12	※ヴェスプレーム大学	ハンガリー	2001. 3. 2
※ノーザンケンタッキー大学	米 国	1990.10. 1	ア ン ダ ラ ス 大 学	インドネシア	2001. 4.23
※ソウル産業大学	韓 国	1992. 3.19	バンガラデシュ農業大学	バンガラデシュ	2001. 8.23
サント・トマス大学	フィリピン	1994. 6.14	※エルフルト大学	ド イ ツ	2002.12. 4
※グリフィス大学	オーストラリア	1995. 3. 3	※吉林大 学	中 国	2003. 5.20
※ユ タ 大 学	米 国	1997. 5.28	※チェンマイ大学	タ イ	2003. 8. 4
※ダ ッ カ 大 学	バンガラデシュ	2004. 6.17			

■部局間協定 (8機関)

大学・学部等名	国 名	協定締結日	協定部局	大学・学部等名	国 名	協定締結日	協定部局
チュラロンコン大学理学部	タ イ	1994. 3. 5	応用生物科学部	※浙江大 学院	中 国	2000.12. 4	医学部
慶北大学校農科大 学	韓 国	1998.12.21	応用生物科学部	※コンケン大学	タ イ	2000.12.18	医学部
コンケン大学農 学	タ イ	2000. 3.27	応用生物科学部	※国立全南大学校工科大学	韓 国	2001. 2. 6	工学部
コンケン大学学部間共同開発研究所	タ イ	2000. 3.27	応用生物科学部	韓国農村振興省国立農業科学・技術院	韓 国	2003. 3.17	応用生物科学部
シドニー大学芸術学部	オーストラリア	2004. 3. 2	教育学部	※ザガジグ大学	エジプト	2004. 5. 5	連合獣医学研究科

※印は、授業料等相互不徴収の大学を示す。

国際交流状況について

1. 岐阜大学外国人研究者受入数

(H16.12.1現在)

区 分	学 部 等	教 育 学 部	地 域 科 学 部	医 学 部	工 学 部	応 用 生 物 科 学 部	そ の 他	合 計
私 費		0	0	5 (1)	2	5 (4)	0	12 (5)
委任経理金・その他		0	1 (1)	3 (1)	6 (1)	5 (1)	4 (2)	19 (6)
合 計		0	1 (1)	8 (2)	8 (1)	10 (5)	4 (2)	31 (11)

1か月以上本学に滞在し、岐阜大学外国人研究者受入れ規則に基づき、受入れを承認された外国人研究者をいう。()内は、女子を内数で示す。

2. 岐阜大学外国人研究者などの訪問数 (1か月未満) (平成15年度)

区 分	学 部 等	教 育 学 部	地 域 科 学 部	医 学 部	工 学 部	農 学 部	そ の 他	合 計
合 計		24	1	21	25	23	57	151

1. 以外で、本学に短期間滞在した外国人研究者等をいう。

3. 岐阜大学教職員海外渡航者数 (平成15年度)

区 分	学 部 等	教 育 学 部	地 域 科 学 部	医 学 部	工 学 部	農 学 部	そ の 他	合 計
出 張		38	16	93	181	48	15	391
研 修		10	4	38	13	11	2	78
合 計		48	20	131	194	59	17	469

4. 岐阜大学学生の留学者数 (平成15年度)

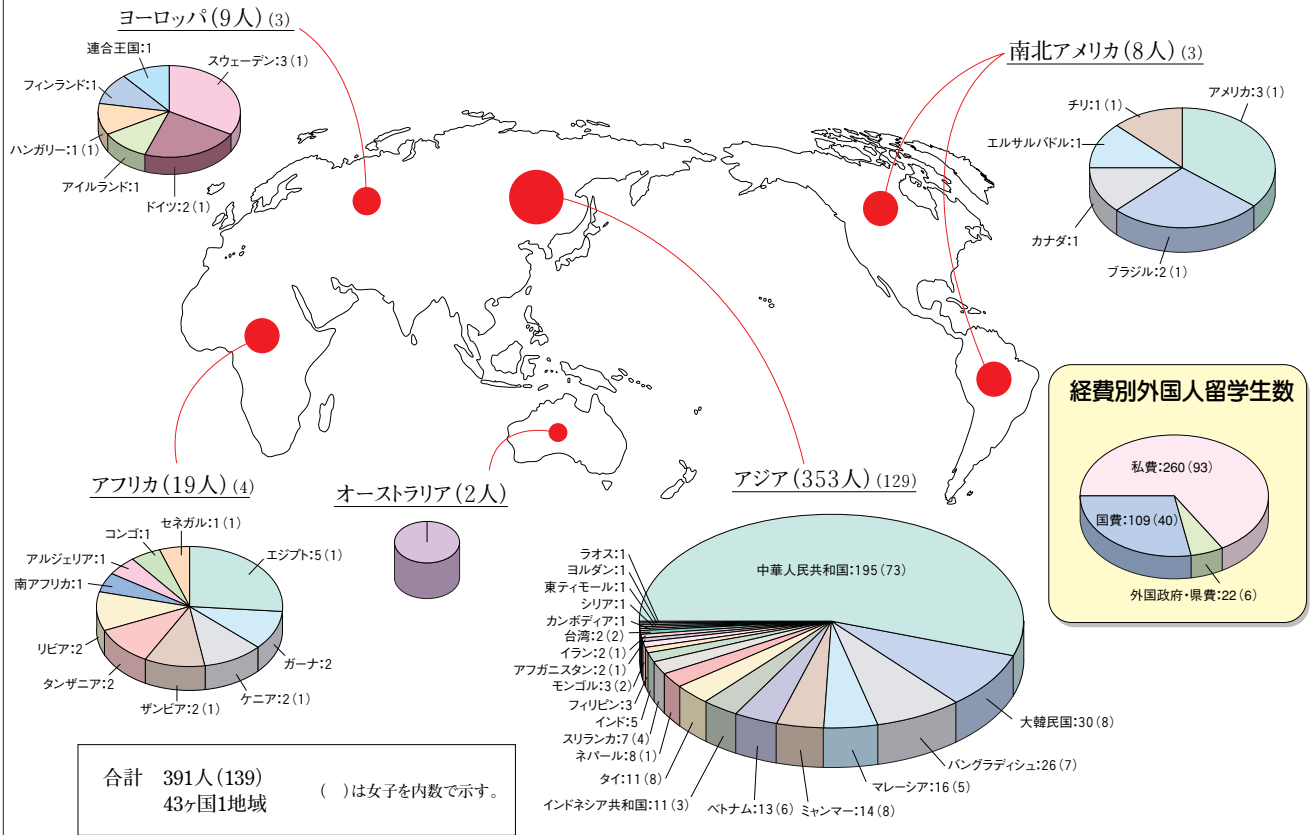
(私事・休職渡航を除く。)

区 分	学 部 等	教 育 学 部	地 域 科 学 部	医 学 部	工 学 部	農 学 部	連 合 農 学 研 究 科	連 合 獣 医 学 研 究 科	合 計
短期留学推進制度		3	1	0	0	0	0	0	4
大学間交流協定		2	1	0	0	1	0	0	4
サマースクール		5	1	0	1	0	0	0	7
休学による留学 (語学研修等含む)		3	4	2	14	5	0	1	39
合 計		13	7	2	15	6	0	1	44

※ 農学部は平成16年4月1日に「応用生物科学部」に改組いたしました。

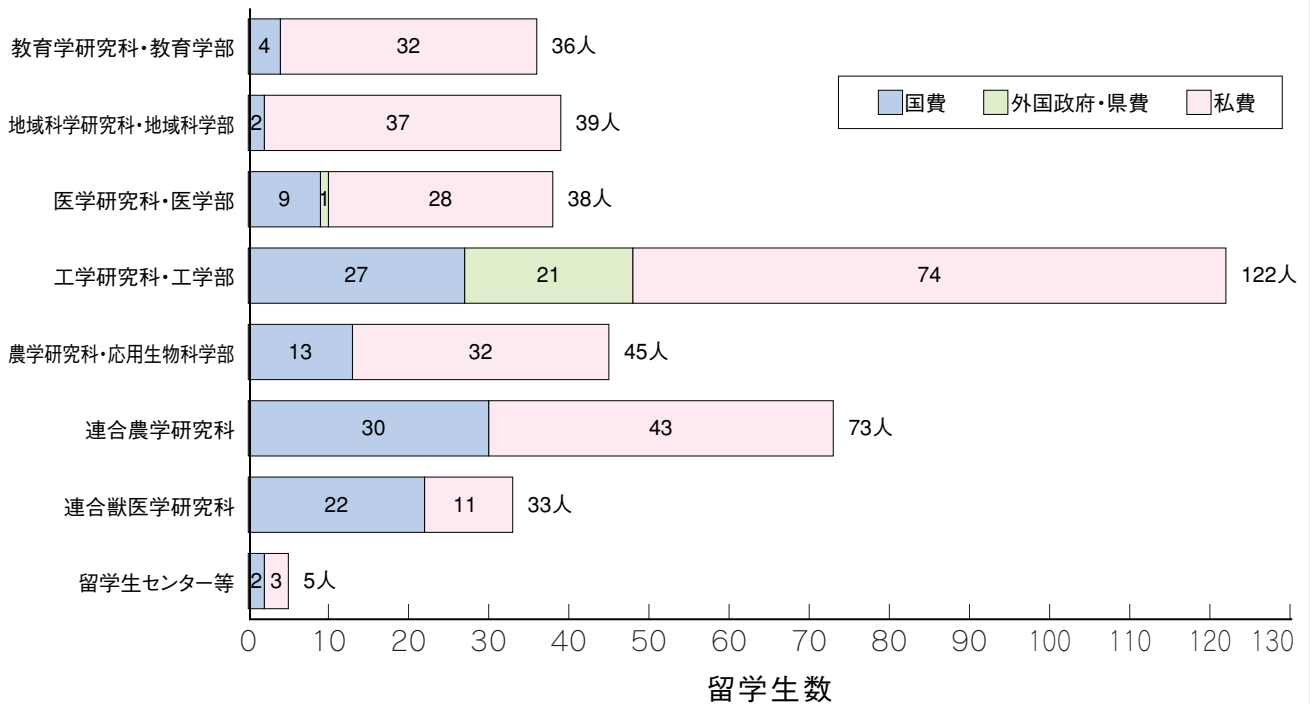
岐阜大学国別外国人留学生数

(2004年11月1日現在)



学部等別・経費別留学生数

(大学院研究科・学部等名)



国際交流奨学寄附金協力団体等一覧 (平成16年12月現在)

イビデン株式会社	コーテック株式会社
医療法人東山会長良川病院	国際ソロプチミスト岐阜
株式会社KV	財団法人井上国際交流基金
株式会社市川工務店	財団法人国際調和クラブ
株式会社エヌテック	財団法人田口福寿会
株式会社大垣共立銀行	サンメッセ株式会社
株式会社後藤孵卵場	昭和コンクリート工業株式会社
株式会社ジムブレーン	大日コンサルタント株式会社
株式会社十六銀行	大日本土木株式会社
株式会社スギヤマメカレトロ	太平洋工業株式会社
株式会社太陽建設コンサルタント	中部電力株式会社岐阜支店
株式会社ノーベル	東海旅客鉄道株式会社
株式会社文溪堂	東邦ガス株式会社岐阜支店
河合石灰工業株式会社	日東興産株式会社北方自動車学校
岐阜県信用農業協同組合連合会	日本耐酸塩工業株式会社
岐阜県農業協同組合中央会	ハートランス株式会社
岐阜車体工業株式会社	バイオニア貿易株式会社
岐阜信用金庫	長谷虎紡績株式会社
岐阜精機工業株式会社	三田洞自動車学校
岐阜乗合自動車株式会社	矢橋工業株式会社
岐阜プラスチック工業株式会社	有限会社東海蜂蜜
クロレラ岐阜販売株式会社	ユニオンテック株式会社

これまで上記の企業・団体から、奨学寄附金のご協力をいただきました。誌上を借りて、厚くお礼申し上げます。

(50音順、敬称略)

◆編集後記

今年も岐阜大学国際交流委員会からのニューズレターをお届けします。回を重ねて今回は第30号となりました。

今年度の岐阜大学は、新たにダッカ大学（バングラデシュ人民共和国）との大学間協定、シドニー大学（オーストラリア）の芸術学部と本学教育学部およびザガジク大学（エジプト）の獣医学部と本学大学院連合獣医学研究科との部局間協定を締結しました（内2大学 巻頭写真）。本号では以下、巻頭の「岐阜大学の国際化のビジョン」（森秀樹国際交流委員会委員長・副学長）にはじまり、まず岐阜大学における国際的な教育・研究交流の一端をごらんいただくことができます。「在外研究報告」は牧秀樹助教授（地域科学部）によるソウル産業大学での滞在研究、「国際学術交流」は粕谷志郎教授（同）による環境とエネルギーに関する第二回国際会議の報告です。

次の「外国人留学生からのメッセージ」と「留学生体験記」は、カンピーナス大学（ブラジル）からの河野貴史君と中国からの白春花さん、グリフィス大学（オーストラリア）への廣瀬千春さん、エアフルト（ドイツ）大学への太田尚孝君からの報告です。さきの国際学術交流報告とともに、本学における国際交流の多彩さを学内外の皆さんに感じ取っていただけるのではないかと思います。その他、短期留学推進制度・研究者交流助成事業に関する情報、岐阜大学における留学生受入の今年度のデータ等を掲載しています。

本学のこれらの活動は、学生・教職員の皆さんと、国際交流奨学寄附金等により力強いご支援をくださっている県下の企業ならびに地域のみなさんによって支えられています。30号を迎えた今号以降も、より積極的に岐阜大学の国際交流に関心をお持ちいただきご支援いただけますよう、心よりお願い申し上げます。（根岸泰子）

※本誌は岐阜大学ホームページ上でも公開されています。

(<http://pub.jim.gifu-u.ac.jp/Docushare/dscgi/ds.py/View/Collection-145>)

編集者：国際交流委員会：應 江 黔（地域科学部）、安部 淳（応用生物科学部）

留学生交流専門委員会：根岸泰子（教育学部）、洞澤 伸（地域科学部）

事務局：黒田広子（国際交流課）、三輪良博（留学生課）

学術情報部国際交流課（Tel：058-293-2011、Fax：058-293-3209）

E-mail:kokusais@cc.gifu-u.ac.jp、ホームページ：<http://www.gifu-u.ac.jp/>